もう一つの旅路

阿部牧郎

もう一つの旅路

阿部牧郎

文藝春秋

もう一つの旅路

一九九一年二月一日　第一刷

定価はカバーに表示してあります

著者　阿部牧郎

発行者　豊田健次

発行所　株式会社　文藝春秋
〒一〇二　東京都千代田区紀尾井町三―二三
東京〇三(三二六五)一二一一

印刷　大日本印刷
製本　大口製本

© Makio Abe 1991 Printed in Japan
ISBN 4-16-312320-2

万一落丁乱丁のあった場合はお取替いたします

もう一つの旅路

初出紙　京都新聞　一九八九年四月二十日より
一九九〇年四月四日まで連載

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目次

告白　5
帰省　73
青い人影　160
山の歌　235
湖の秋　313

装画　根岸芳郎
AD　森　玲子

告　白

看護婦に案内されて、津島良一は集中治療室へ入った。

一歩なかへふみこむなり、津島は悲しみとやりきれなさのいりまじった感情におそわれる。一カ月まえから、母親のみさ子がここに入っている。危篤状態だった。

月に二度しか家族は面会をゆるされない。津島はきょうが二度目の訪問だった。

窓ぎわの、母のベッドに向かって、津島はしずかに足を運んだ。ほかの患者の様子を、一人ずつ観察していた。

集中治療室は教室くらいの広さである。五、六メートルずつ間隔をとって、ベッドが配置されている。さまざまな医療機械や計器が、金属の仕切りのように各ベッドのそばにおいてあった。

どのベッドにも老人が寝ている。男女を問わず、老人たちは子供みたいに小さかった。鼻にチューブを通した者がいる。点滴や排尿のチューブはみんながつけている。人口呼吸器の音もきこえた。

六人の患者がここで治療をうけていた。四人は眠っている。二人は目をあけてぼんやり天井を見ていた。津島たちへ目を向ける者はいない。だれも身動きさえしない。生きることへの興味をなくしてしまったような肉体が、しぼむだけしぼんで、時間の流れてゆく音にじっと耳をすましていた。

目をあけている患者の一人が母のみさ子だった。津島が近づくと、ゆっくりと顔をこちらへ向けた。ほかの患者よりは元気そうだ。看護婦がやさしい口調で二、三、みさ子に質問した。もぐもぐと口を動かして、かすかな声でみさ子はこたえた。ものをいうたびに小さな顔にきざまれたおびただしいしわが、脈絡なく揺れ動いた。

まったく、しわだらけだ。しわのなかに顔が埋まっている。津島は熱いものがこみあげて、のどがつまった。

「容体に変化はありません。面会は十五分程度にしてください」

看護婦が津島に声をかけて去っていった。

「どうだお母さん、元気か」

みさ子の顔を津島は見おろした。

だまってみさ子は津島をみつめた。しわだらけの顔は黄ばんだいやな色をしている。だが、目は澄んでいた。青いほどである。

「おまえに話があったのだ。むかしから気になってだことだども」

東北訛でみさ子はささやくようにいった。澄んだ目に、ふいに涙があふれた。

「話ってなんだ、お母さん。遠慮しないでいってくれよ」

津島ははっきりした声でいった。大きな声を出さないと、つらい気持が増すだけだ。

「困ったことなのだよ。おまえはな、良一、私の子ではないかもしれないのだ」

相変らず声は小さい。ことばの意味がわかるまで、津島は何秒か必要だった。
おどろきが、つぎにおそってきた。
「なんだって。藪から棒に。おれがお母さんの子じゃないって。どういうことなんだ」
思ってもみない事柄だった。
津島は母をみつめた。頭がボケてしまったのではないか。心配になる。
「そのうち話さねばならねえと、ずっと思ってきたんだよ。だども、なかなかいえなくてなあ。いいにくかったもの」
しわだらけの顔が歪んだ。胸に穴があいたように弱々しい話しかたである。
母のみさ子は肝臓にガンがある。三年まえに黄疸が出て、検査の結果それがわかった。
みさ子は七十六歳である。老齢のガンは進行がおそい。手術しないほうが長生きできるだろう。医師の忠告をいれて、この京都北区の私立病院へかよって治療をつづけた。
半年まえにみさ子は歩けなくなった。くるものがきたらしい。覚悟をきめて津島は母を入院させた。ガンの進行は最終段階にきていた。五カ月後、みさ子は集中治療室へ移らねばならなかった。
「私が入院するとき、京大病院にしろとおまえはいったべ。私はいうときかなかった。あれにはわけがあるのだ。京大病院には、どうしても入りたくながった」
みさ子はそこで話を中断した。呼吸をととのえてから口をひらいた。
津島良一は昭和十三年九月四日生れである。京都大学付属病院の産科の分娩室でうぶ声をあげた。健康な赤ん坊だった。
生後五日目。赤ん坊の良一は看護婦に抱かれて入浴にいった。二十分ばかりしてみさ子のもとへ帰ってきた。

みさ子は赤ん坊を抱いた。顔をみつめるうち、異変に気づいた。くちびるのかたちが良一とはちがう。耳もちがっている。脚のかたちも、明らかに良一のものではなかった。

みさ子はカッと頭が熱くなった。

「看護婦さん、きてください。この子はうちの子じゃない。人ちがいです。うちの子はどこへいったんですか」

夢中でみさ子はさけんでいた。

看護婦がやってきた。不機嫌な面持である。非をみとめようとしない。

みさ子は貧血を起しそうになった。渾身の力をふるってベッドをおりた。赤ん坊を抱いて産科のベッドを巡回しはじめた。

「この赤ちゃん、どなたのですか。だれか人ちがいをされていませんか。私の子はどこにいるんですか——」

産科の病棟が騒然となった。ベッドの母親たちは、それぞれの赤ん坊の見直しをはじめた。

産科の各室では、五十数名の新生児が母親のそばのベビーベッドに寝かされていた。男の子は三十名ぐらいだった。ほとんどの新生児が眠っている。目をあけている者は三分の一もいない。何人かが泣き声をあげたり、母親の乳を吸っていた。

「済みません。赤ちゃんは男ですか」

みさ子は母親の一人一人に声をかける。

男ときくと、丹念に顔や手足をしらべた。母親たちは不安そうにみさ子とわが子を見くらべる。敵意をあらわにする者もいた。みさ子が一礼してつぎのベッドへ移ると、母親たちはほっとした面持で赤ん坊の頭をなでたりした。

二人部屋でみさ子は、わが子の良一にめぐりあった。くちびるのかたち。足のかたち。たしか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

に自分の生んだ子である。
　みさ子はこれが最初の出産だった。生れた翌日から、ほとんど一日中赤ん坊をみつめてすごした。見まちがうはずはない。
「済みません奥さん。その子、私の子なんです。お風呂でまちがわれて。奥さんの赤ちゃんは、こちらではないでしょうか」
　その新生児の母親にみさ子は声をかけた。
　ついてきた看護婦をふりかえった。まちがわれた新生児を途中で看護婦にわたしてあった。
　ベビーベッドにいた新生児を、みさ子はすでに抱きあげていた。もう絶対に離さない。両腕に力をこめた。
「あっ、こっちのヤヤコ（赤ん坊）がうちのんですかいな。ちょっと見せとおくれやす」
　看護婦から母親は赤ん坊をうけとった。
　納得した面持でうなずいた。顔をあげて、みさ子に笑いかけた。
「これ、たしかにうちのヤヤコですわ。そちらのお子がお風呂からもどったとき、なんかおかしいなあと思うてましてん。おおきに。ようさがしておくれやした。間違うたままひきとってたら、おたがい、えらいことになるとこどしたな」
　母親はコロコロと笑った。腕のなかの赤ん坊を揺すぶった。とりちがえをさほどの大事件と思っていないらしい。
「申しわけありません。いそがしかったので、つい――」
　看護婦が頭をさげた。蒼白になって声をふるわせる。
「仕方おへんがな。生れたばっかりのヤヤコなんて、みんな似たような顔ですもん。奥さん、おおきに。ほんまたすかりました」

母親は看護婦とみさ子の双方に、立てつづけに語りかけた。
みさ子は腹を立てていた。母親の態度があまりに鷹揚である。もっときびしく看護婦の責任を追及すべき事柄だと思う。このまま済ませてしまって、いいものだろうか。
「ほんとうに気をつけてくださいね。もうすこしで私たち、他人の子供を育てることになったんだから。親の身になって、赤ちゃんの世話をしてほしいわ」
みさ子は看護婦に苦情をいった。それで気持がおさまった。
赤ん坊をとりもどして、ほっとしていた。激したわりに怒りが持続しない。
「私、津島みさ子といいます。もしあとでなにかあってはいけませんから、失礼ですがお名前を教えていただけませんか」
相手の母親にみさ子は訊いた。
「ああ、そうどすか。私、進藤ミヨと申します。家は千本今出川どす」
人なつこい笑顔でミヨは頭をさげた。憎めない人柄のようだった。
約一週間後、みさ子の退院の日がきた。荷物をととのえてから、二人部屋へ挨拶にいった。部屋の入口に掲げられた名札が「進藤」ではなくなっていた。看護婦の詰所できいてみると、進藤ミヨはきのう退院したということだった。
それ以来、みさ子は進藤ミヨに会っていない。消息もわからない。取り返してきた赤ん坊は、良一と名づけられた。表面なんの問題もなく育った。
みさ子はときおり不安にかられた。ほんとうにこの子はわが子なのだろうか。誤ってひきとったのではないか。だれか進藤ミヨ以外の母親のもとへ、ほんとうのわが子は届けられていたのではないか。
ミヨのもとから赤ん坊をひきとるとき、見誤らなかった自信はあった。まちがいなくわが子だ

った。相手側のミヨも、おかしいと思っていたようだ。すぐに交換に応じた。
みさ子はなにも不安に思う必要はなかった。良一との血のつながりを否定するような事実が出たわけでもない。成長するにつれて良一は父親に似てきた。小学校で血液型の検査をうけたが、その面でも不審はなかった。
それでもみさ子は不安を消し去ることができなかった。良一が反抗的だったり、食物などの好みが親と異っていたりすると、みさ子は心配になった。まさかと思いながら、まじまじと良一をみつめたことが何度もあった。
良一はもう五十歳である。七十六になる今日まで、みさ子は不安を抱いてきたのだ。
「――もっと早く話せば良かったのにな。どうしてもおら、話せなかったもの。申しわけないこと、してしまった」
長話をみさ子はしめくくった。ささやくような声だった。
目をつぶって寝息を立てた。長話で精根を使いはたした様子である。
しわだらけの母の寝顔を、茫然と津島はみつめていた。頭が混乱している。
「待ってくれよ、お母さん。もうすこし話をきかせてくれ」
津島良一はみさ子を揺り起した。
みさ子の腕についた二本のチューブもいっしょに揺れ動いた。
しわだらけの顔のなかで両目があいた。無感動にみさ子は津島を見まもる。
「いまの話、おやじは知っていたの。おれがほんとうの息子なのかどうか、おやじ、ずっと疑っていたんだろうか」
津島は訊いた。身を乗りだして、母の顔を凝視した。
津島の父はもう亡くなった。このあいだ七回忌をすませたところだ。

ゆっくりとみさ子はかぶりをふった。また津島は衝撃をうけた。五十年近くともに暮した夫にさえみさ子は内密にしていたのだった。
「すると、この一件はお母さんだけの秘密なんだね。お母さんと、相手の進藤ミヨという人以外には、だれも知らないんだね」
しばらくみさ子はじっとしていた。
やがて、かすかにかぶりをふった。などやかな表情になった。
「ちがうのか。ほかに知っている人がいるんだね。だれなのそれは。親戚の人なの」
みさ子はしばらくとたえなかった。
やがて、小さく口を動かした。津島は耳を寄せる。小野さん。母はささやいた。
「小野さん――。お母さんと女学校で同級だった人だね。あの人に話したのか」
みさ子はうなずいた。口をもぐもぐさせて、またささやくように話しはじめた。
みさ子は東北のA県の女学校を出た。同級生に小野節子という女性がいた。
夫の勤務の都合で、二人とも京都で暮していた。週に一度は会っておしゃべりした。学校時代よりずっと親しくなった。
良一を生んで退院したあと、みさ子は取違え事件のいきさつを節子にだけ教えたのだ。
話をきいて節子はひどく腹を立てた。彼女自身、前の年に男の子を出産していた。
「だまっていてはいけないわ。今後もこんな事件が起るかもしれないんだから。抗議しましょうよ」
節子はいきさつを書いて、京大付属病院の院長宛に投書した。
数日後に反応があった。京大病院の産科部長と看護婦長が、みさ子の家へやってきたのだ。手土産を出して詫びをいった。以後、京大病院の産科では、新生児の足首に名札をつけることにし

たらしい。
産科部長と婦長が家にきたのは、ウイークデーの午後だった。みさ子の夫は役所へ出かけて、留守だった。この件を知らないまま、一生を終えることになった。
すべてを話し終ると、母はうとうとしはじめた。
ほとんど寝息も立てない。見ていると津島は、母の呼吸が停まったのかと不安になるほどだった。
母の寝顔には、長年の秘密を告白し終えたやすらぎがにじんでいた。だが、それは津島の思いすごしかもしれない。たんに話し疲れたというだけのようにもみえる。
津島がじつはみさ子の子供でなかったという証拠があるのなら、さっきの話は重大である。ほんとうの親を津島はさがしにかからねばならない。それは本来の人生をさがすことでもある。津島は実の親ではない男女に育てられ、本来たどるはずのない人生をたどってきたことになるのだ。
だが、そんな証拠はなかった。生後まもなく、津島は危くよその子供と取違えられそうになった。それだけのことである。
みさ子がよその赤ん坊を見誤ったとは考えられない。津島がみさ子の子ではない可能性など、ほとんどゼロである。人は暮しの平穏をねがう半面、波乱ももとめる。ひょっとしたら良一はよその子なのかもしれない――そう考えることをみさ子は、生活の適度な刺戟にしていたのではないか。
「津島さん、面会時間は終りました。こちらから連絡がなければ、二週間後にまたおいでくださいね」
看護婦がそばへきていた。
眠っているみさ子や、点滴や尿の目盛りを彼女はチェックした。

津島は腰をあげた。しわだらけの母の顔をもう一度みつめた。まぎれもなく母の顔である。ほかに母がいるなんて、とても考えられない。もしそんなことになったら、津島にとって、世界はいまとはまったくちがう様相のものに変るだろう。

津島は集中治療室を出た。担当医から母の容体の説明をきいた。とくに変化はない。わずかずつみさ子は死に向かって歩いている。最期のときをひきのばすためだけの治療が行われているにすぎない。

タクシーで津島は家に向かった。下鴨に津島は住んでいる。病院からは車で十五分もかからない。

くもり空だった。土曜日の昼まえである。見馴れた住宅街の風景が、なにかしらじらしく目に映った。スイスの別荘ふうのレストランや、窓を白く縁どったイギリスふうの住宅が、ひどく奇異に感じられた。どこか知らない街を通っているような気がする。これは京都ではないと彼は思う。馴染み深い京都がとつぜんよその街になった。

こんな気持になったのははじめてである。やはり母からきいた話のせいらしい。

良一をつれもどしたとき、誤ってべつの赤ん坊をえらんだのではないか。良一はほんとうはよその子供だったのではないか。一抹の不安を抱いてみさ子は生きてきたらしい。

ありえないことだった。津島の血液型はBである。父はA、母のみさ子はBだった。この面からは、みさ子と津島の血縁関係に不審はない。

亡くなった父親に津島は顔がよく似ている。やや神経質な点は父親似、負けん気の強いところは母親ゆずりだった。ほかに両親がいるなんて、現実の問題として考えられない。

だが、津島はこの話が頭から離れなかった。自分はよその子供だったかもしれない。みさ子にひきとられなかったら、実の両親のもとで、全然ちがう人生をたどっていたのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.